

中島家寄贈目錄

—佐伯藩碩学・中島子玉資料等—

中島子玉について

徳川幕府の文教政策重視による全国的な文運興隆の気運を機敏に察してか、佐伯藩では早くも安永六年（一七七七）に藩校の四教室が開校、そして四年後の天明元年（一七八一）には天下に名だたる佐伯文庫が創立された。

以来藩内興学の府として、教授陣には開校当初の矢野黙斎や山本七兵衛をはじめ、松下筑陰、明石秋室、後には秋月橋門といった当時一流の学者を招聘するなかで藩の子弟教育の振興がはかられていた。

その甲斐あつて文化・文政期は佐伯藩の文学大いにふるい、優れた学者や人材が輩出した。その筆頭がなんとといっても中島子玉である。

中島子玉は、本名大實（たいらい）一の字は如玉、米華と号し、また海棠室（かいどうか）（二に海棠窩）主人、古香外史（ここうがいし）とも号した。佐伯藩徒士中島幹右衛門の長子として、享和元年（一八〇一）佐伯城下鉄砲町の家生まれた。幼名盛太郎、のち増太（二に益多・益太）と改める。

子玉は幼少の頃から学問を好み、非常に俊才であつたので、藩は

将来を見越して資糧を給し、業成つて大成したら藩に戻つて「国用ニ供セン」との方針により日田の広瀬淡窓に就いて学ばせることにした。文化十三年（一八一六）三月、子玉十六歳のときである。

果して、淡窓の門に入ってわずか二年足らずで塾制の根幹になる月旦評の六級にのぼり、都講となつては塾政を管理したので衆目見張るところとなつた。

文政元年（一八一八）十一月、頼山陽が九州へ来歴して淡窓を訪ねた。接待役に選ばれた子玉を見た山陽はそのあまりの若さに一言も言葉交わさなかつたが、後で添削を求められた子玉の詩文を一読してガク然とし、容を改めてその才子ぶりに驚いた。山陽は棉京後、ことあるごとに

「私は西遊して、山水には耶馬溪を得、人材には中島子玉を得た。」とほめちぎっている。

文政二年七月、子玉は師の勸奨により筑前に遊び、亀井昭陽に従学することになった。昭陽も子玉の才を知り、古詩を贈つてこれを令尹子玉に比したという。

翌文政三年二月また日田に帰つて成宜園の都講となる。同年五月

には開学以来はじめての七級生に昇級し、淡窓が教育した塾生三千のなかにあつて頂点をきわめたのである。

文政四年六月子玉は塾を辞し、肥筑遊歴の途に就いた。佐賀に古賀教室を訪ねて教えを請うたのも、恐らく長崎へ行く途次のことであろう。同年十一月早急に帰藩せよとの君命により子玉は長崎から口田を経て佐伯に帰省した。

十六歳から二十一歳まで佐伯を留守にした子玉は、その間淡窓はもとより、昭陽・般若・原古處・長梅外等の先生老輩に就いて歴史百家詩文の研精鏘磨を累ね、或いは、雲華上人と邂逅、今や学成つて故郷に錦を飾つた訳である。

翌文政五年の秋、藩命により江戸に遊学することになり、瀬戸内海を航行して淀川を溯航し、東海道を經て江戸に無事着いたのは初冬の頃か。

文政六年子玉二十三歳で昌平黉に入校、贊を劉侗庵に委ね、林蔡酒や松平冠山等に知られて礼遇を受けることになる。最高学府の同校にあつても子玉の評価は材名、詩名ともに高く、まもなく斉長(説書室の室長)にも任じられた。

文政八年四月子玉二十五歳、遊学の期満ちて帰国することとなつた。帰藩後は四教室の教授として、後進の指導にあつたのは勿論のこと、子玉自身佐伯文庫の膨大なコレクションを渉猟して学究に励んだであろう。そして文政十年にはこれまでの学問出稽の塵によ

り別に一家を興して中小姓格に列せられたのは格別の措置であつた。

文政十二年子玉二十九歳、さらに旺盛な研究心を抱いて肥筑から京坂の方へ旅行した。大阪では篠崎小竹を訪ね、京都では頼山陽や猪飼敬所等の譜大家と交遊しながら、文政十三年まで在京したようである。

以後佐伯にあつては四教室で子弟の教授にあたっていたが、天保四年(一八三三)藩命により正使小林七郎左衛門の介添として日田に差遣された。その時九年ぶりに恩師淡窓と会見し子弟の情を温めたのもつかの間、子玉は病により、翌年三月十五日、三十四歳の若年で逝去した。墓所は久成寺の境内で淡窓の撰になる碑誌銘が刻している。

子玉の生涯は、結果的には佐伯から出遊することの方が多かつたが、常に全国的な学芸・学界の動向を視野におさめながら、各地で関連な研學に動かし、その華麗な文才を磨いていったのである。とりわけ、昌平黉在学中に発表した「美人十二詠」(文政六・七年頃か)は、文思が深妙で、詞藻が優雅であつたため、忽ちのうちに伝え翻せられ、「宜園秀才」の名は都下に轟いたという。子玉の詩風の特徴で唐の季長吉の體に倣つた「牛羸」「地獄変相図」「哭「脩兒」歌」「七誕八首」等も文政六年頃の作。「帯」「履」は、同年十二月三日昌平黉内での物騒な事件を叙したのも、「許中作歌」等は文政七年の筆作

で聖寛での円熟ぶりを示している。江戸遊学を終えた文政八年、武部を発して佐伯に至る三十日間の様子を書いた隨筆「扇録碎話」には子玉の容貌にまつわる笑話も挿入されている。

子玉の面目躍如たるもう一方の代表作に「日本詠史新業府」がある。頼山陽の「日本詠史業府」の體に倣って六十六首を連詠、更に旧作の「咬豆」「求養」を附して日本六十六州二嶋に擬し、それぞれに歴史事象を与えている。

遺著に「愛琴堂全集」八巻がある。この内「蛸聚集」の「抵二木刀村」「河内路上」「龍川舟遊七首」以下十數首は、淡窓の塾を辭して江戸へ遊学するまでの間、佐伯の四教堂で子弟を教授する傍ら近郊を散策して賦詠したものであろう。中でも長詩「孤公嫁女詞」は、子玉の詩作の才学を存分に発揮したものととして評價が高い。この外、門人高妻芳州等が編纂した「米華遺稿」がよく知られている。

※ ※ ※

この度、中島家から上記の中島子玉自筆本などをはじめとした関係図書類（六十七部・百二十八冊）並びに書類類（二巻）・軸物（四十四幅）・落款（印）・藏書印・子玉愛用の硯類等一式を佐伯市に寄贈していただきました。中島ナヲ氏（別府市在住）には、終始佐伯の地に想いを馳せての御好意に、この場を借りて深く感謝申し上げます。

子玉には一子榮太郎があったが、三才にしてこの愛児を失ったため、子玉が興した中島家は日出藩三ノ丸家老長沢多助があとをつぎ、その後、固一郎、宗一と続いて、現在のナヲ氏は子玉より数えて代々孫にあたることになる。

本目錄は、碩学・中島子玉の顕彰に資せんがため圖書の部を主体に整理したものです。基礎調査にあたっては狩生熊義先生に精力的な労をとっていただきました。衷心より敬意を表します。

なお書目中、子玉以外・中島家伝来の所蔵品も併収しておりますが、その大部においては、まさに子玉が生ある限り彼の全生涯を賭して摸索した思想と行動を系統的に裏付けることのできる貴重な資料が多数含まれています。

平成二年三月

佐伯市教育委員会

※ この一文は「豊人文志」「大分県偉人伝」等により補訂したものです。

中島家寄贈目録

— 佐伯藩碩学・中島子玉資料等 —

目次

中島子玉について

古書類

中島家旧蔵古書分類目録

一 (準) 漢籍 (和本)

二 国書 (和書)

古書写真

書簡類

巻物一 亀井昱 (昭陽) より子玉宛書状

巻物二 高島秋帆より子玉宛書状他十三通

軸物 (一部)

・ 毛利高泰

・ 平野五岳

・ 秋月橋門

・ 亀田蘭斎

・ 宿岑面・子玉費

51

50

50

50

50

48

47

25

14

9

| | |
|-------------|----|
| 蔵書印・落款(印) 他 | 52 |
| 子玉愛用の硯類 | 52 |

中島家旧蔵古書分類目録

— 中島子玉自著・写本・その他 —

凡 例

- 一 この目録は、今回中島家から佐伯市に寄贈された古書を（準）漢籍と和書に分類して収めた。
- 一 中島子玉に関する図書類は、一部を除き、それぞれについて子玉の自筆か否かの識別は困難であるため、書入・印記・巻頭の首題・内容細目等を参考のため注記した。
- 一 分類は、図書の全体構成を示すため一応内閣文庫の古書分類法に従って配列した。
- 一 書名は、原則として本文巻頭に採り、それを欠く場合は題簽等によった。
- 一 標目とした書名以外の別書名は、（ ）内に記した。
- 一 著（撰）編者名等は本名に続けて、必要に応じ字名や（ ）内に号等を付記し、著（撰）者名のみ記載では「著」「撰」を省略した。その他実物になき部分は（ ）で包んだ。
- 一 刊行については初版の出版年に続けて（ ）内に後印・修年、出版者・書肆（二名までは記載し、三名以上の場合には筆頭と末尾を掲げた）、藏版者等を記した。出版地のうち浪華・大坂等は「大坂」に統一した。

中島家旧蔵古書分類目録

——中島子玉自著・写本・その他——

一 (準) 漢籍 (和本)

◎ 經部 (書類)

一尚書考 六卷 写

〔此の本は大寶龜并塾に在りし時勿々と写し、今之を読めば謬不少を反省〕中島子玉自筆 (表紙)。
〔尚書〕は中国古典の中で最も古い伝統をもち、堯・舜以來古代王者の記録。

二尚書考 上・中・下 写

(詩類)

三 詩經古注標記 (版心)

(題簽・毛詩鄭箋標註) 二十卷 (卷七、十二、十八、二十欠)
字 (野) 成之 (東山) 明治補刻 (大阪・文海堂藏)

西周から春秋までの歌謡を集めた經典。國風 (國々の民謡)、小・大雅 (宮廷の儀礼歌)、頌 (廟祭歌) に分類。

判 冊數

半 一

半 三

大 三

(春秋類)

四 春秋左伝考義

(書外題・左伝考義) 写

半 四

麟(二二卷) 隠公十一年(経) 伝・桓公十七年経伝・莊公三十二年経伝・閔公二年経伝・僖公(一

十五) 年経伝

鳳(三卷)

僖公(十六一三十三) 年経伝・文公十八年経伝・宣公十八年経伝

龜(四卷)

成公十八年経伝・襄公三十一年経伝

竜(五卷)

昭公三十二年(経) 伝・定公十五年経伝・哀公二十七年(経) 伝

〔左伝〕は魯国の編年史「春秋」三伝の一。「経」中に「伝」を分割して相付す。

五 左伝春秋雕題略

(題簽・題題) 写

半 六

第一冊 自隠公至閔公 自一卷至四卷

第二冊 僖公 五卷

第三冊 自文公至成公 自六卷至八卷

第四冊 襄公 九卷

第五冊 昭公 十卷

第六冊 自定公至哀公 自十一卷至十二卷止

晋・杜預集解により題解を施す。海棠高印あり。

(群経総義類)

六 七経雕題略

(題簽・書経雕題二) 残本(書之下) 写

中 一

子玉印あり。

(四書類)

七 論 語 語 由 (書外題・語由)二十卷(卷一―四欠) 龜井魯・道敷(南溟)撰 龜井昱・元鳳(昭陽)校 写 中長 三

海棠齋藏とあり。

八 論 語 (見返・改正家註論語)十卷(卷三―六欠) 冢田虎(大峯)注 天明四初上木(文政三校正改刻) (雄風館) 半長 三

九 (明治訓点) 四書集註 (題簽) 大学章句・中庸章句各一卷 論語(集註)十卷(版心四卷) 孟子(集註)十四卷(版心四卷) 久留間與三(版心四卷) 明治十七刊(大阪・岡本仙助、中野啓蔵(東同盟)會梓) 特小 五

(小学類)

二 字 彙 子集一二・丑集三上・寅集三下・卯集四上・辰集四中・巳集四下・午集五・申集六 下・戌集八九・亥集十 十七・首尾各一卷(有欠) 明梅鼎祚撰 梅膺祚音釈 刊不明(鹿角山房藏版) 半 一二

楷書の畫數により排列した辞典。

二 三 字 經 宋王忠顯 写 半 一

幼童を対象にした代表的テキスト。中国の各時代の變遷、字間の仕方など常識的内容を説く。

三 (増補註解) 詩韻含英異同弁 (題簽) 十八卷 清劉文蔚編 谷禮補 明治十二刊(大阪・松村九兵衛、初原喜兵衛) (此村正輔藏版) (銅版) 特小 四

◎子部 (雑家類)

一三 (標題徐状元補注) 蒙求校本

(題簽・箋註蒙求校本)上・中・下三巻・附官職考略
岡白駒(龍洲)撰 佐々木站(尚陽)標碇 安政五刻成(明治四再
版) (大阪・山内五郎助、河内屋亀七等)

大 三

【蒙求】は、古代より南北朝までの古人の有名な言行・事績を一話四字、二句対偶、八句換韻で表わし、もともとは兒童の諷誦習得用教科書として通行。標題に詳注を施す。

(小説家類)

一四 世 説 音 釈

存六巻(巻五十一)
恩田仲任(葱樓)編
東四郎等

岡田守常校 文化十三刊(江戸・前川六左衛門、尾張片野

大 三

明・王世貞「世説新語補」にもとづく注釈書(後漢末から東晋末へかけての士大夫の逸話集)。

◎集部 (別集類)

一五 唐李長吉歌詩

四巻・外巻一巻
唐李賀撰 宋吳正子注

劉辰翁評 文政元刊(官板)

半長 三

一六 王 維 詩 鈔

唐王維 写

王維拔萃(「五古・和使君五郎西樓望遠思婦」外)。中島季正藏書(花押)。子玉印あり。

半 一

一七 忠 雅 堂 詩 鈔

乾・坤
清蔣士銓 写

「自丹陽放舟赴江陰道中作」外。中島益太藏書。海棠窩・子玉印あり。
蔣士銓は清の詩人、戯曲作家。

中長 二

「白田陣屋舟赴江輪道中作」外。中島益太殿書。海棠窩・子玉印あり。
蔣士銓は清の詩人、戯曲作家。

六 忠雅堂詩鈔(四全) 清蔣士銓 写

「河口」外。子玉印あり。

半 一

五 堯峰文鈔 清汪瑛 写

「大通橋分司壁記」外。

汪瑛は清、長洲の人。順治十二年の進士。明史の編集にも與かり、文は根柢を経史に置く。

半 一

(その他)

三〇 雑抄(書外題) 写

元好問(五古「狐城南」外)詩鈔と国朝詩別裁(慎郡王「雙徑」外)を収む。

卷末に「海西第一風流刺史米華集」、裏表紙に「芳洲海棠窩藏」とある(阿弟高妻芳洲の戲書か)。子玉印あり。

半 一

※一は亀井昭陽、四は亀井南溪、五・六は中井積徳(履軒)の撰か。

二 国書 (和書)

◎総記 (叢書)

一 海棠窩叢書 中島子玉編 写

判 冊數
小長 四

龍集 蓋香園小稿 (頼山陽詩文集)

虎集 中興五侯詠・洪範圖解・粟山堂射字歌・啊餘韻語・流水詩藁・琉球人和歌・回文類聚統編函鈔

鼠集 保建大記 (卷上・下)

兔集 近人文醇 (頼興・子成 (山陽)、斎藤曉、柴野允升 (碧海)、祇園璋 (南海)、日本史表、葛西實

(因是))

近人詩醇 (中井積善 (竹山)、竹村實 (海齋・海藏)、篠崎弼・承弼 (小竹)、林衡 (述齋・蕉軒))

海棠窩と記し、子玉印あり。

◎仏教 (寺院・寺誌)

二 二十四輩順拝図会 (存) 卷四・越後之部 零本
(釈了貞) 刊不明

半 一

◎言語 (音韻・字音)

三 韻鏡聞書 写

半 一

音韻四声反切の原理。京都三条了蓮寺無相文雄上人伝。

白杵の翰筆戊申より受け継ぎ、聞書として記録。子玉印あり。

音聲匹声反切の原理 芳翁三多子選で、無料文獻上人佐
白杵の鶴家戊申より受け継ぎ、聞書として記録。子玉印あり。

(辞書・字典)

四 四声解環

阜門注 太田屋顯校 安政五官許 (明治七再刻) (大阪・岡田茂兵衛藏版) (銅版)

特小

五 (大增補) 四声解環

阜門撰 太田屋顯校 明治十附言 (大阪・三木、岡田藏版)

特小

六 (畫引節用) 明治正字典

(龜頭漢語明治無雙玉編・國民実益明治いろは字典)
古座谷徳次郎編 (明治三十九・七版印) (大阪・千葉久栄堂藏) (銅版)

特小

◎文学 (漢文・詩文評・作詩作文)

七 絶句類選

(題效・絶句類選評本) 二十一卷
津阪孝綽 (東陽) 編 斎藤正謙 (拙堂) 評 明治十五刊 (大阪・桂雲堂梓行)

特小

五

八 今人詩英

藤森大雅 (天山・弘庵) 編 文政七序 刊不明

中長

一

子玉の「昌平舎書懐十首之一」(寮法不許飲酒故及)を収む。海葉窩印あり。

(漢文・別集)

九 愛琴堂全集

中島子玉

小長

七

第一冊 詩 美人十二詠 並序

(髮、眉、耳、目、鼻、口、鬢、肩、乳、手、腰、足)・送二大舍上人

還二京師・重陽・中秋無月・題画・帯・綬・節婦吟・陽妃春睡圖和・徐文長韻・做二昌

谷體一外(甲申の筆作多し)

第二冊 數首集卷之三 奉別二南梁先生(長梅外)一・專念寺詩會得レ歌・彦山上宮・宿二彦山一・

論レ詩效三元遺山體一外

朝敷集卷之四 觀二神田一・席上呈二高嶋米山一・八月十四日・抵二木刀村一・河内路上・龍川舟遊七首・詠史・狐公嫁女國・宿國根駅・大堰川・牛鼻嶽二李長吉詩一・題二地獄愛相圖一
做二李長吉體一・哭二脩兒一歌做二長吉體一外

第三冊 談俠卷上 水野十郎右・三浦小次郎・小出兵助・放駒四郎衛・夢市郎兵・牛五衛・金神長五郎・茂衛・臂久八・白與三右・唐犬十右猪首衛(卷末に水筑周逸写とあり)

談俠卷下 鑰瀾左・三郎衛・深見貞國・寺西閑心猪采動与衛・滅金喜右・今若三右・猪瀬莊衛・鷺森伝右・死人小右・小五郎衛・腕喜左・桜井丹波・平井權八・神祇党(卷末に吉野定吉写とあり)

第四冊 理窟瑣記 孝経・孟子語有二圭角一・論語之唐棣齊詩之逸・殷庶・子姪・伯榮・孟子行二井

田法一・蒼生・五礼・一天五帝・騎・詩経字數・大学・蕙二書於壁中一・九嬪世婦・粟居・賤貨外

理窟瑣記 項羽本紀在二高祖之前一・司馬相如論贊後人之筆・火馬・白起以後之多殺・孟子

東坡長二於曹賊一外

理窟瑣記 竊行・毛利・毛利判官・守君・高屋之歌非二仁徳帝一外

第五冊 理窟瑣記 山椒魚・葉天不レ知レ詩・四季杜・八行・天然佳對 外

理窟瑣記 定家之言・唐之詩文・邦俗以二九月十三夜一賞レ月・八月十五日九月十三日雲宿清明故以二此同夜一厥レ月・日蓮放二佐渡一九月十三夜向レ月訴レ冤・葉天詩曰金銀十二行 外
理窟瑣記 秋風客・詠二陶詩一・螺山詩・恒遠・浮鳥・涼字・六朝句・東坡云李杜之後詩人

10 愛琴堂全集拔萃 写

子玉二十三歳・文政六年の自序あり。江戸昌平費在字中の撰（『題真致集言』外）。版心四教堂藏。

繼作・近休時・柳宗元之詩如「冬日之日」・草花物之詩如「夏月之月」・東坡論三書詩一・杜少陵詩・元遠山論二種實詩一 外

第六冊

理窟瑣記 俗語各有「所」本・芙蓉非「山名」・山海經・日田川多「香魚」

理窟瑣記 小野道風古之善「書」也・仁齋伊藤先生年十七詠「琵琶湖」・秋玉山畢生所「願」三・栗山先生・頼子成与「人」相接常掛「鏡」眼一・淡窓広先生・東屋先生・頼子成作「日本外史」一・春台曰仁齋東屋皆温厚君子也・龜鶴齋在「萬八橋」上「作」書画一・角瓶・婦人不「立」瀨一・婦人削肩・湯折箸・烟葉・魚酢・桃符・口琵琶・角疑之始・櫛卷之始・青日傘始・陶器肥前為「上」・備前德利・禪制・則上用「紙」帛瓦礫「簍」一・韓嘉盧嗜「烟」・夜鷹・本邦所産硯・古硯・二本松異獸・山伏・鏡石・魚石樹葉石 外

第七冊

雜文 說鬼室文稿一王導論・奉「復」二教堂先生「書」・菅公不「為」雷弁 說鬼室文稿一四怪・

答「二」広瀬謙吉「一」書・学琴說・談「二」魯仲連伝「一」・孝婦録序・七誕八首（見末葉題三十首之二）日成・夏録碎話一松生翁・馬夫語・飲馬食與・嬾・対語・駅妓・不「見」富士一・短令・駒軒・一桜二橋・賭酒・蚊「不」死・說「二」王荆公文「一」・亮「二」西瓜「一」者言・送「二」加藤公保「一」序・送「二」黒瀧元節「一」序・観基・策論常用

以上、各冊の首題や文頭の一部を摘録

全八巻（冊）ありしも一本を失いたる高妻友（芳洲）の奥書（天保十三年）あり。子玉の代表作（肉筆）とされるもの。

二 愛琴堂全集拔萃 写

子玉二十五歳頃の撰（『扇録碎話—松生翁』外）。版心四教堂蔵。

半 一

三〔日本〕詠史楽府六十六関 頼山陽 写

文政十二年篠崎小竹書後あり。

半 一

日本詠史続楽府 写

子玉二十九歳の時、小竹の処にて山陽の日本楽府を觀て自らも志して模作。兩者一冊に合本、「日本詠史楽府」となす。

三 日本詠史新楽府 写

子玉の前書楽府を別冊にしたもの。

半 一

四 米華遺稿 写

広瀬淡窓に提出して評を仰いだ稿（『燈下梅影』外）。

半 一

五 慊園 敵 帚 仁科幹巻頭言 広瀬先生（淡窓）評 青霞奏貞（秋室か）跋批 写

子玉詩文集（『過友人故居』外）。

半 一

一六 遠思楼詩集（二） 広瀬建・子基（淡窓） 写

淡窓の詩集（『論詩贈加峯長郷中島子玉』外）。「遠思楼」は淡窓の書齋名。

半 一

七 古 序 翼 六卷(天・地・人) 龜井昱・元鳳(昭隱) 写

版心・春星草堂。子玉印あり。

八 昭 陽 文 集 雅・頌(風集欠) 龜井昭陽 写

子玉印あり。

九 南 冥 詩 草 龜井南冥 写

寛政元年起草(書懷二十四首)。

三〇 百 羅 屯 教 練 写

自一教至三教。昌平坂学問所用簿で子玉が学生時代に課題として求められた題詠を収む(古賀穀堂の評あり)。

【美人十二詠】あり。子玉二十四歳頃のもの多し。

三一 叢 薈 録 經 説 部 二 月 鈔 (甲 申) 写

子玉二十四歳、在都期間中の論説。

三二 淹 齋 敵 帯 (甲 申) 写

策・駱駝説・狄仁傑論・留侯不立韓後論・詩論弁折四則・葉師寺伯徳君墓碑銘・遊遼東風記・同声社攝
会約・記賢・記秋海棠・論賤岳之戦・春澤石銘并叙・書寶賢寺上梁板・升降管賦・題西征草首・題文天
祥忠孝二大字・西郷翁夫婦合葬墓碑銘
以上、子玉が在都の頃の作品十七首を摘録。

半 三

半 二

半 一

大 一

半 一

半 一

三 淹齋詩帳 (己丑) 写

文政十二年稿 (宇野巳蔵送予到馬声瀟家再宿而別) 外

半

二 侗庵先生詩文所見手鈔 古賀燧 (侗庵) 写

慶応元年 (乙丑) 劉石舟より托送依頼の題旨書あり (表紙)。巻末に「鬼神論」を収む。

半

三 拙文 三首 写

子玉稿 (猪飼敬所先生七十寿叙) 「張子房論」 「狄仁傑論」。

半

三 策 (論節用) 写

淹齋散帯「策」と共に子玉の真摯な論策。

半

七 草 稿 (戊寅) 写

子玉が日田咸宜園の学生の頃の稿 (詠問史) 外。

半

六 鄙 稿 写

舟之 (子玉か) 稿 (奉呈備後管 (茶山) 先生書)。

半

三 艸 稿 写

子玉稿 (奉呈空石先生) 「日田雜詠二首」外。

半

三〇草

稿写

子玉稿（『雙奇亭記』外）。

半

一

三三草

藁写

子玉稿（『夏日村居』外）。

特小

一

三三鄙

稿写

子玉稿（『題瀟明婦去來圖』外）。

半

一

三三山陽遺稿

文・十卷 詩・七卷 拾遺・一卷 附行状
頼山陽 明治十二刊（中島徳兵衛藏版）

特小

五

三四橘門韻語

乾・坤二卷
秋月龍（橋門）著
書堂藏版

秋月新太郎選 谷水梓校 明治十六刊（東京・博聞社）（読翠）

半長

二

（漢文・日記・遊記）

三五西帰紀行

石川剛（彦岳）安永九 写

半

一

巻末に「天保辛卯小春十日、四教堂ニ於イテ写了、時ニ冬雨蕭々トシテ晦ノ如シ。米花子」との奥書あり。

(和歌・歌論・作法)

二 初学和歌式 存三卷(卷一・三・上卷) 残本
〔有賀長伯〕刊不明

半 一

(和歌・撰集)

三 膳方百人一首・女訓宝文庫(題簽) 刊不明(大阪・實本伊三郎、福富藤吉)

半 一

四 (標註)七種百人一首 佐々木信綱 明治二十六刊(博文館)

(菊) 一

◎日本史(通史)

五 国史略 自後鳥羽帝 至順徳帝 写

半 一

(雑史)

六 赤穂四十七士伝 (初三葉を欠く)〔青山延光か〕不全本 写

半 一

七 義人遺草 一卷附一卷
青山延光(佩笠斎)編 天保大序 天保十二佐佐木重之版 慶応二刊(京都・勝村
治右衛門 水戸・須原屋安次郎等)〔江戸・王山堂 水戸・東櫻楼〕

半 一

(伝記)

三 龍溪矢野文雄君伝 小栗又一 昭和五刊(東京・春陽堂)

(菊)

一

(系譜・諸家)

四 諸家略伝 写

大

一

大内氏・大友氏・立花氏・高橋紹運・浮田氏・浦生氏郷・浦生郷舎・尼子氏・土州一條氏・長曾我部氏・田中吉政・大谷吉継・長束正家・増田長盛・齋藤利三・富田高定・後藤基次・江口三郎右衛門・黒田三郎を収む。

(史料)

四 合衆国伯理璽天德書翰和解 写

特大

一

合衆国伯理璽天德副翰和解

合衆国水師提督上書和解

合衆国水師提督口上書和解

嘉永六年木許要之進写 木村重信主とある。

◎理 学 (化学)

罌 新式有機化学

存一卷(巻下)残本
高橋正純 岡 有沢基次校
松岡文橋訳 明治十二刊(大阪・柳原喜兵衛) (積玉園
蔵版)

半

◎ (その他)

罌 (『五帝授受之次 歌』外)

不全本 写

半

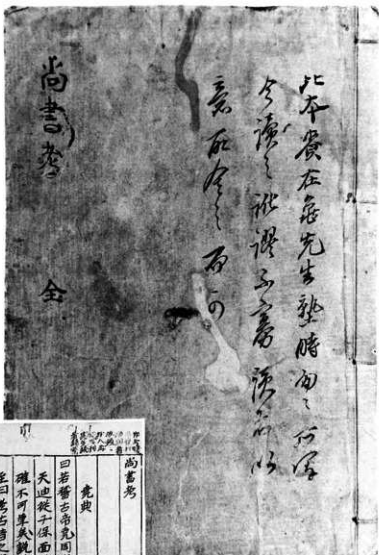
罌 (『東涯論氏姓』)

存巻葉一葉 写

半

版心・尚書堂叢書の用箋なるも筆者不明。

寮国書総目録には、「愛琴堂詩集」「愛琴堂詩鈔」「愛琴堂集」「如蘭詩集」「中島米華稿本」「日本詠史新楽府(文政十二)」「米華遺稿」「米華雜著」等の書目記載があり、このうち、内閣文庫には、「日本詠史新楽府」(明治二年刊)が所蔵されている。



此本實在西先生塾時向之所得
 今讀之世誤不之為誤所以
 意取存之

尚書考

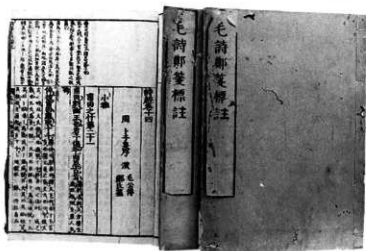
全

| | | |
|-----|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 尚書考 | 堯典 | <p> <small>此書古本充同官云君履曆古史官祖而石錄五 天迎鏡子保面替天若據此二者則孔傳之說明 確不可單矣觀者以曰若為榮顯辭無替之也也 至曰考古昔之字堯則每亦蓋虞亮而古為華國 焉。然此理履軒四虞萬當作夏古今又合于堯 典則亦明夏文所作春秋傳據則晉稱夏者可證</small> </p> |
|-----|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

1-1 尚書考



1-2 尚書考



1-3 詩經古注標記



1-4 春秋左傳考義



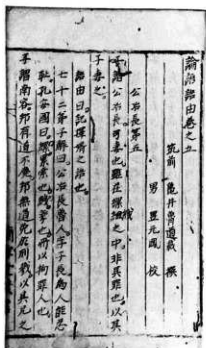
1—5 左傳春秋題略



1—6 七經題略



1-8 論語



1-7 論語語中



1-11 三字經



1-10 字彙



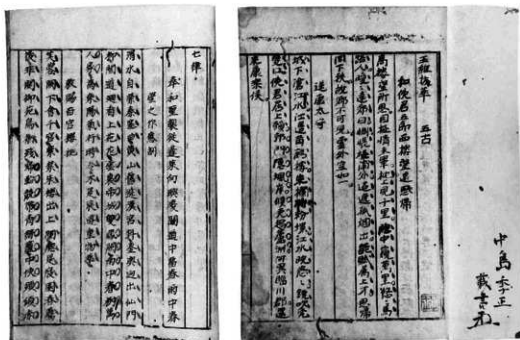
1-13 (標題徐狀元補注) 蒙求校本



1-14 世說音釋



1-15 唐李長吉歌詩



1-16 王維詩鈔



忠雅堂詩鈔卷一
自丹陽啟舟赴江溪道中作
放舟自崇城入昆陵道東流盡天濤欲盡為傾似
客刀筆未盡復寄起時林瀟灑浮瞻戶邑日陳
賦味探風少一美鶴道
目笑口悅便安龍澤趨句下
江行自宜輕帆帆力阻舍舟或置舍舟我象可數
如風拓御道了勞馬浮岸珠輝映斷時遊在湖明
樓空胡塔閣閣空到船曾岸候雖更鳴在氣以明

1-17 忠雅堂詩鈔

堯峰文鈔
大年
大運橋身日記
堯峰十二年冬予於今日大運橋生人初為法成
第江先年古成古書為父長子法清先立此為第
在是司五師及第下其法清身事法清法清法清
明年及子五師及第下其法清身事法清法清法清
可以平身數其在子法清身事法清法清法清
法清身事法清法清法清法清法清法清法清

1-19 堯峰文鈔

河
舟中馳臥安知倦先許舟楫也三山如畫也一舟如
勢官亦宜樂樂矣身神會動時仍入龍虎爭戰野
揚春局再若每夜則然德黃印的筆
地亦高如屋對前老于不餘快應神機若門外自打
今日見物變態心似雲龍角飛鶴地山看風一筆
○舟酒
萬酒不成醉醉風吹壯心壯氣系云爭欲如死氣
北風飄空下雲山脚我深醉本無心氣氣感快登船

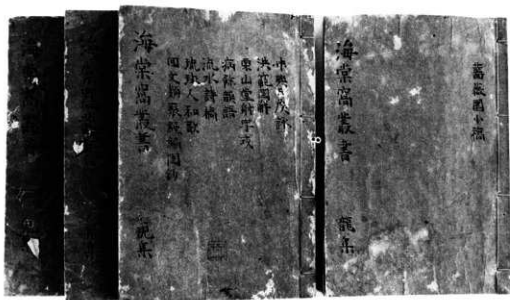
1-18 忠雅堂詩鈔(四全)



2-1 海棠窩叢書 (龍集)



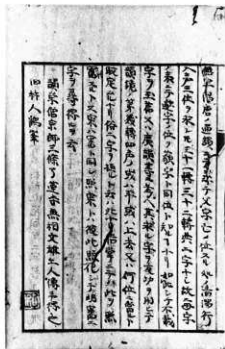
1-20 龍抄



2-1 海棠窩叢書



2-8 今人詩英



2-3 韻鏡開書



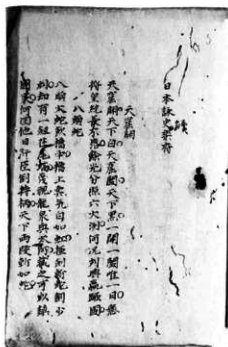
2-9 愛琴堂全集



2-11 愛琴堂全集拔萃



2-10 愛琴堂全集拔萃



2-12 日本詠史統業府



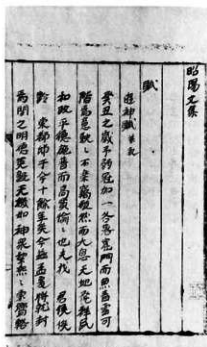
2-12 (日本) 詠史統業府六十六開



2-16 遠思樓詩集 (二)



2-15 擘圖散帶



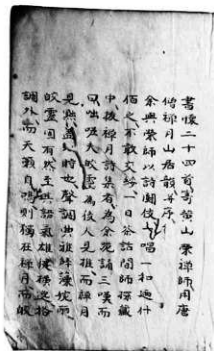
2-18 昭陽文集



2-17 古序翼



2-20 百羅屯教誨



2-19 南冥詩草



2-22 澆齋啟帝 (甲申)



2-21 經言錄 經說部二月鈔 (甲申)

爾春先生陸父序先牛鈔卷之一
 曾撰侯春序大覽願更群雅如手九道揚立碑周壽
 位平頌使前進莫忘前序矣益去時此處成傷却初
 狗聲處處播聲聲莫忘其山勝開一快者
 三 春遊錄 三月廿三日
 同遊者魏九元袁台神風數月高於東先金山腰
 陰食食形海海成雲成噴雲三氣噴雲奇跡
 六 魏魏是魏元作撰早行自山噴雲地勢
 一 靈仲行

2-24 何庵先生詩文所見手鈔

已丑稿
 半點已已藏是手到馬多畫衣其范而別
 謝君是成步留畫矣路使人忘故界唯恨野林唯而
 化社村村何國分使基今朝集烟港日三又路小
 春遊錄編本德費四度頭五相噴播提名體影道
 本德費四度頭五相噴播提名體影道
 一 謝君是成步留畫矣路使人忘故界唯恨野林唯而
 化社村村何國分使基今朝集烟港日三又路小
 春遊錄編本德費四度頭五相噴播提名體影道
 一 謝君是成步留畫矣路使人忘故界唯恨野林唯而
 化社村村何國分使基今朝集烟港日三又路小
 春遊錄編本德費四度頭五相噴播提名體影道

2-23 淹齋詩稿 (己丑)

屠知政門先生七十壽叙
 余始遇平公親叙嘗嘆賦之有繁能其清澗純之景
 而心素之既而指其是上地之所此錄亦昂皆物
 既心之唯唯他則之所為固思是共山川有屬之
 要之所使德歡至後觀平安人物家叙其所叙文人
 生士約不下數十人可得親知然皆他州所叙數共
 生於平安初十不健一又求其所標者而讀之
 皆貴富而三貴甲比之而工取醫之有益於世皆
 及似有不及者何哉蓋自伊蘇父子之法也平安山
 川衆麗之氣不尋獲於文人學士而分鍾於百工厥

2-25 拙文三首

沈德隱覽政
 依譜
 中書大費拜具
 三月分
 此文心悅成友所中
 沈德隱覽政
 依譜
 中書大費拜具
 三月分
 此文心悅成友所中



2-31 草稿



2-30 草稿



2-34 橫門韻語



2-32 韻稿

西歸紀行

石川剛

安永庚子秋剛歸職時為舊七月廿四日公召剛
面會夙夜相勞之勞五分賜給服一領蓋得恩也
二十七日廿子又召剛面會是為亦賜時服既而
命酌衣代以雙斗目蓋以其與公賜同物故有此
節里也及父又賜酒于前呼道侍以助歡陰極
矣余以丙申二月石茶于此已歷五載賦在梧宮
息田子由海長其賦則承之既陸世子剛亦備願
聞時余庸其苦林里行消滅春臨惠者字德撰載

西歸九月十九日登京師廿日浪華港口東海舟

雖故日阻風漂泊于偏頭諸島前舟及港下湖

無所保保業中得盜及所記次第整理以寄示京

歸路友

安永庚子季秋下旬

西歸九月十九日登京師廿日浪華港口東海舟

石川剛

2-35 西歸紀行

後為朝天皇嘗暴疾母後皇子修理太子信隆不軌

嗣名授以高倉御守中食奉 齊及 前帝幸西

國 後白河天皇 仁皇孫守貞時上殿見 法

皇 帝 命 四 處 之 治 皇 孫 悅 使 皇 孫 是 時

東 西 有 一 帝 幸 西 國 皇 孫 悅 出 日 法 皇 〇 處

連 雖 為 清 政 女 塔 留 不 官 職 如 故 〇 齊 永 二 年 九 月

前 帝 賜 守 位 八 體 官 平 軍 已 至 天 幸 府 堂 度 權 分

權 為 起 六 次 之 平 比 乃 是 前 帝 幸 西 國 皇 孫 二 男

在 中 將 清 經 授 皇 孫 後 御 浦 內 度 民 印 皇 龍 奉 也 前

曰大學者若得奉先祀而香良民舊業則無恨快力以

鞠先君大學者得得患故而羅不及香良民則直就其

頭以報先君耳將監等從之其時多矣良君乃會

衆謂曰有我良議輸城請看互解衣既處從容論及

請君去國宜無死所哉我既聽其意而羅雖有然若後

衆益畏氣大野遠逃亡城人雖時公使將至和國皆出

兵境上備望國城恒提民庶然發難日與吉田萬毛

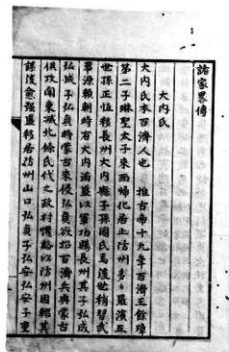
及先展坐解舍掃九民民願利四方落謀聖到航如

流事無望滿城中頻望人始知其有材幹其時

先是天步用事皇務繁數怒滿粉然至是實德

2-40 赤穗四十七士伝

2-39 国史略



2-43 諸家畧傳



2-41 義人道草



2-46 (五帝授受之次) 歌



2-44 合衆國伯理厘天德書翰和解

先是大野麻葉書翰致意謝辭於是皇德書翰長

書簡類
軸物(二)部
藏書印・落款(印)他
子玉愛用の硯類

高島秋帆より中島子玉宛書状

秋帆様へ
 拝啓
 昨今、秋の気配が濃くなり、
 秋葉の紅葉も、次第々々
 と見事に色づき始め、
 遠くから、秋の訪れを
 告げるかのように、
 涼風が吹く。此の季節、
 秋の味、秋の情、
 秋の風情、を存分に
 味わい、楽しむことが、
 最も大切なことである。

(原紙)

中段右へ

秋月橋門より子玉宛書状

子玉様へ
 拝啓
 今頃、秋の深まりが、
 益々感じられる。秋の
 風情、秋の景色、
 秋の心遣い、を大切に
 守り、愛でたい。

中島子玉宛書状
 九月十一日
 高島秋帆

下段右へ

塩谷甲蔵より子玉宛書状

子玉様へ
 拝啓
 秋の深まりが、
 益々感じられる。秋の
 風情、秋の景色、
 秋の心遣い、を大切に
 守り、愛でたい。

次頁上段右へ

筆者不詳(子玉宛書状)

塩谷代官よりの招待状 (広瀬淡窓自筆)

Handwritten Japanese text, likely a formal invitation or official document, written in vertical columns. The text is dense and includes various characters and punctuation typical of Edo-period correspondence.

中段右へ

菅二中 (郎か) より子玉宛書状

蒲生善之丞より子玉宛書状

額山陽より雲華上人宛書状

筆者不詳 (子玉宛書状)

Handwritten Japanese text, likely a formal invitation or official document, written in vertical columns. The text is dense and includes various characters and punctuation typical of Edo-period correspondence.

下段右へ

古賀穀堂より子玉宛書状

(下詳)

大空情理より子玉宛書状

Handwritten Japanese text, likely a formal invitation or official document, written in vertical columns. The text is dense and includes various characters and punctuation typical of Edo-period correspondence.

(終末)

(不詳)

筆者不詳 (子玉宛書状)

毛利高泰



平野五岳



秋月城門



龜田鵬齋





款記



戊子冬日寫為
中鳴先醒

雀岑



子玉贊



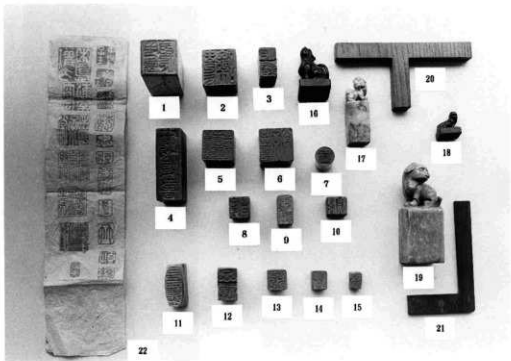
歷歲梅臺誌遠漢餘拓手難稱
 倫飲為夢量去地不數分明說與人
 果能生信一枝先三日不其黃已錄阿
 味強對命兄象銀毫習也小適並何
 新一生兒滿丈夫欺以故之天當中珠
 萬若未抗舞未極漏池如天去子其

公疏十一拜
 萬年世道
 為兄他日
 一玩

古名公文大表

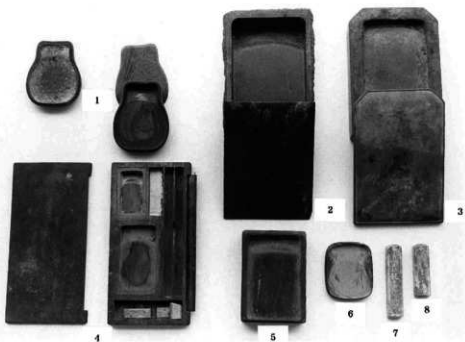


106-1



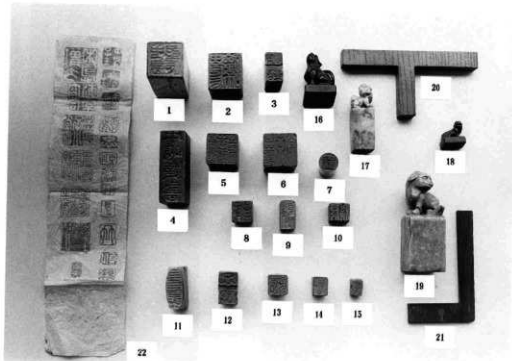
106-2

藏書印・落款(印) 他



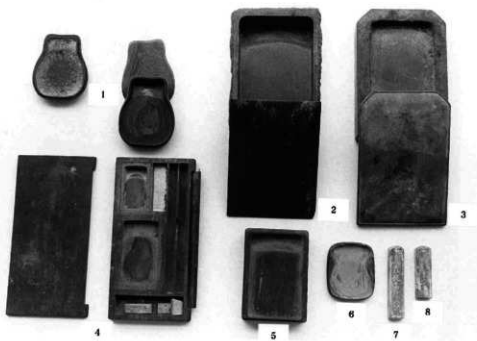
子玉受用の規類

106-1



106-2

蔵書印・落款(印)他



子玉愛用の硯類

中島家寄贈目録

— 佐伯藩碩学・中島子玉資料等 —

平成2年3月31日発行【非売品】

編集 佐伯市教育委員会
佐伯市中村南町1番1号

発行 佐伯市教育委員会
教育長 島井喜久太

印刷 佐伯印刷株式会社
佐伯市中央区新屋敷343